「和歌山空襲と家族の記録」

保ヶ渕　八重子　（７９歳）

私達は、和歌山市内で鉄工所を経営する父と母、男の子３人女の子４人の９人家族で暮らしていました。私は未だ幼く断片的な記憶ですが、空襲警報のサイレンの音、飛行機のゴーという音など怖くて暗い戦争のイメージが残っています。当時私達の家の前には、父が空襲時に逃げ込むように小さな防空壕が掘ってありました。警報が鳴ると皆頭巾を被っただけの姿で駆け込みました。空襲が未だ激しくない時等、次男で８歳の弘は、今でいうプラモデルのような工作飛行機作りに夢中で、幾ら呼んでも来ず姉に耳を引っ張られて初めて来る位で笑い合う程のんびりしていました。でもいよいよ空襲が激しくなり頻度も増すと状況は一変しました。暗い中を大きな荷物を持った老若男女が一斉に争うように避難所目差して叫び逃げ惑いました。空襲で私達の家が丸焼けになる最後の日、電気を消し真っ暗い中を母は荷物と２才の幸子を背負い、姉は私をおんぶして、皆夫々（それぞれ）大きな荷物を持って爆撃音の中をお寺の方へ逃げました。焼夷弾の音、バンバンパチパチザー、物が焼ける音、匂い、悲鳴、怒号などが混ざり合い世界が割れるような音の中で、今でも耳を覆いたくなるのは、突然、老夫婦の「お前なんか死んでしまえ。」と互いに言い争う声が聞こえた時です。子供心にも、大変怖くて悲しい気持ちになりました。姉は、「八重ちゃんをおんぶして逃げてると飛

行機のゴーっという音がしたとたん、おんぶしている真後ろが見るみるうちに燃え上がって、あんたに火が飛び移ったかと、燃えて死んだのかと母に『早よ見て～！』と叫んだんよ。そしたら母がぐうぐう寝てるといったので笑うに笑えず、我に返ったら泣いてしまった。」と、よくその時の事を話してくれました。とにかくその様に、やっとの思いで避難先のお寺に着き、大勢がひしめく廊下で一晩疲れ切って眠りました。翌朝は又何キロも歩き海南へ着いたら又そこから親類が用意してくれた野上という田舎にへとへとになり乍らも辿り着きました。以前の家は丸焼けで跡かたもなくなっていました。私は近くの小学校に入り、次第に友達も出来少しずつ落ち着いてきました。でもまだ衛生状態も悪くシラミが沸いている子等がいて、皆運動場にならばされて頭から服の中まで真っ白い粉を吹きかけられ皆、全身粉だらけになり大笑いしたものですが、後にＤＤＴは有害という事で廃止になりました。その頃は食べる物もなく、バッタや野草、おかゆ、ドジョウがいれば上等で皆やせていました。生活も苦しくその頃兄は１７才位で満州開拓に参加したのですが、待っていたのは過酷な労働で知り合った友人３人着の身着のまま何とか日本に戻ってきたそうで、帰るなり夢破れて申し訳なく思ったのか「只今帰りました。」と母の前で両手を付き、赤土塗りのボロ服姿で報告したと、母は今は亡きその子を思っては何時も涙ぐんでいました。満州に行ったり、買い出しに行ったり、男の子ならではの働きをしてくれていたの

に、男の子３人が当時流行(はや)った腸チフスで１ヶ月の間に次々と亡くなってしまったのです。母も高熱に侵されましたが、幸いに回復し残された女の子４人を守ってくれました。しかし、３人の男の子を同時に亡くし、悲嘆で気も変になる程だったと思います。亡くなった子等が綴った小さな手帳、変色し今では考えられない粗末な紙に、絵日記、考察記等、小さな字でビッシリ書かれている手帳を大事に残してあります。いろいろ話せば尽きませんが、苦労しながらも、しっかり者の次女が川西で美容院を開業し、母を中心に女性５人で頑張ってきました。私たちは戦争で、男の子３人を亡くした後も、もし生きていればと楽しく想像を巡らしたりもしましたが、同時に日本だけでなく世界にも大きな犠牲者が在る事を思うと戦争の限りない罪深さを感じます。

　戦後７５年の年月を生き抜いた日本人のドラマを見聞きするたび、今の平和の喜びと共に、涙があふれてなりません。私も昭和１５年１２月１２日生まれでもうすぐ８０才になりますが、ここまで何事もなく生きれたのも皆さんのお陰だと感謝感謝だと喜んでいます。